

財団法人 自然保護助成基金

ニュース

No. 9
1999. 12. 8

山川草木悉皆調査

大場達之 (当基金理事)

ここ 20 年ほど、市民と一緒に野外を歩き、地域の植物を記録しています。最近では小学校区の植物を、住民とともに調べています。数平方キロ程度の小学校区でも、そこに自生する植物の種類を全部記録するというのはなかなか大変です。一回に 1~2 キロくらいの距離を、目に入る植物を全部記録して歩きます。最初は忙しくて遅々たる歩みですが、次第に普通の散歩程度に歩けるようになります。環境が変わると新しく出現する種類が増え、環境ごとに植物が変わるのを実感します。水田があると新たに加わる植物が数十種類を下りません。地域の生物多様性に水田が果たしている役割を感じます。一回に記録される植物(シダ類と種子植物)は 150 種類を下ることはなく 500 種類以上を記録したこともあります。鳥類のラインセンサスをゲーム化したバードソンというものの植物版ですが記録される種類はそれよりも一桁多くなります。記録係は大変で“一日中カキドオシ”などと冗談もでます(カキドオシという植物があります)。

このような調査は地域の自然環境の記録として、環境の変化を知る原点にもなります。さらに住民が地域の自然環境を知り、考える契機として重要です。

街や里の変哲もない植物を繰り返し調べてなにがおもしろいのかと同業の研究者は申しませんが、野外を歩き、何百という植物を速やかに同定するのは足腰と脳の老化を防ぎますし、街や里の雑草の勢力分布に、このところ大きな変動が起きていることなどもわかってきました。

皆様の身近に植物に詳しい人がいたら、100mほどの距離でも一緒に歩いて、すべての植物を記録してみませんか。ただし身近な植物の名前をすべて答えることのできる植物学者は品薄ですが、

第 5 回 P.N.ファンド助成成果発表会

1998 年度国内助成の成果発表会です。どなたでも気軽にご参加になれます。

日時：1999 年 12 月 11 日(土) 10:40 ~ 17:00

場所：こどもの城 8 階 801 研修室

(渋谷区神宮前 5-53-1, TEL: 03-3797-5677)

平成11年度助成事業報告

平成11年度当基金の助成総額	2,492万円		
(財) 日本自然保護協会との共同事業による公募助成	20件	1,792万円	
(財) 世界自然保護基金日本委員会の事業助成	1件	200万	〃
(財) 日本自然保護協会の事業助成	1件	200万	〃
その他の助成	3件	300万	〃

が決定、今年より平成12年にかけて助成。(内容は以下に紹介)

平成11年度当基金の助成内容

- (財) 世界自然保護基金日本委員会への独自事業助成 助成額：200万円
 - ・ 白保サンゴ礁保全にかかわる諸活動
 - ・ 南西諸島自然保護シンポジウムWWFは2000年4月サンゴ礁保護センターを開設の予定。

- (財) 日本自然保護協会への独自事業助成 助成額：200万円
 - ・ NACS-J 自然観察指導員講習会および指導員フォローアップのプログラム再構築

- シンポジウム「北方四島の自然を考える」の開催 (別項6ページ)
(財) 日本野鳥の会国際センター 助成額：50万円

- シンポジウム「北方系生物の起源と生物地理学」の論文集の出版助成
北方系生物研究会 助成額：50万円
平成11年2月に開催されたシンポジウム「北方系生物の起源と生物地理学」の論文集の出版に際し、ロシア語 → 英語翻訳作業を助成。

- 「極東ロシア森林ホットスポット・プロジェクト」への助成 (継続5年目)
地球の友ジャパン 助成額：200万円
 - ・ 「極東ロシア地域のホット・スポット」の改訂版の作成
1996年に発刊された同書を、最新の情報により改訂・補筆して2000年に出版する。
 - ・ ホット・スポット保護活動のため支援を要する現地専門家との連絡手引書の作成
上記資料が具体的に保護に資することができるように、現地で緊急に支援を必要としているNGO、活動家を具体的に紹介し、海外助成団体と結び付けるための手引書。
 - ・ 北方四島の自然保護活動に対する支援
北方四島の情報が入手しにくいので、サハリンの活動団体を通じて入手を依頼してゆく。

○プロ・ナトゥーラ・ファンド（第10期）助成先一覧

（当基金と（財）日本自然保護協会との共同事業による助成）

国内調査研究助成

単位：千円

No.	研究テーマ	助成先	代表者	助成額
1	下北半島に生息する北限のニホンザルの生息数および全分布域の緊急実態調査	下北野生ニホンザル研究グループ	伊沢 紘生 (宮城教育大)	1,400
2	尾瀬に侵入したシカが湿原植物群落におよぼす影響	尾瀬のシカ調査会	五十嵐 知行 (東京大)	670
3 継続	吉野川下流域における環境現況調査	吉野川環境ネットワーク	石井 愷義 (徳島大)	820
4	長良川河口堰によって失われた環境の仮想評価	長良川のCVMを実施する会	粕谷 志郎 (岐阜大)	380
5	長野県における草本植物の生活史研究	長野県草本植物生活史研究プロジェクト	池田 登志男 (長野県植物研究会)	500
6	森林施業により劣化した森林生態系の生物多様性保全を目指した復元生態学的研究	森林生態系復元研究グループ	吉田 俊也 (北海道大)	1,200
7	金華山島のシカの高密度化による小型化と繁殖率の低下についての研究	金華山島シカ研究グループ	高槻 成紀 (東京大)	700
合計				5,670

国内活動助成

No.	研究テーマ	助成先	代表者	助成額
1	早池峰フォーラム開催	早池峰フォーラム実行委員会	多田 和広	430
2	利根川の水と自然を守るプロジェクト	利根川の水と自然を守る取手連絡	近藤 欣子	400
3	八方尾根の自然観察ガイド作成のための調査	自然観察指導員長野県連絡会	小川 朱実	500
4	谷津干潟紹介リーフレット作成	千葉の干潟を守る会	大浜 清	750
5	東中国山地ツキノワグマ個体群保全を目的とした「東中国クマ集会」の成果のまとめと普及活動	東中国クマ集会実行委員会	藤本 光博	630
6	谷戸田に基層文化を採る	山崎の谷戸を愛する会	相川 明子	500
合計				3,210

海外調査研究助成

No.	研究テーマ	所属機関	代表者・()内推薦者	助成額
1	トキ野生化実験および追跡調査に関する研究	中国陝西トキ教護飼育センター (中国)	席 詠梅 (シイメイ) (河合 明宣・放送大)	1,110
2	ドイインタノン国立公園における植生帯構造の研究と研究成果の環境教育への応用	カセサート大学 (タイ)	Pongsak Sahunalu (サハル) (神崎護・京都大)	2,000
3	ネパールシワリク山地の植生の生態学的研究	リソース・ネパール	Dinesh Raj Bhuju (ディネシュ・ブジュ) (中村 俊彦・千葉中央大)	1,300
4	インドネシア産鳥類及び哺乳類の遺伝子バンクの蓄積	インドネシア科学院	Sri Sulandari (スランタリ) (東 正剛・北海道大)	1,630
5 継続	カムチャツカ半島と日本の間の鳥類の渡り解明ー保護のための普及啓蒙ー	カムチャツカ生態研究所 (ロシア)	Yuri Gerasimov (ユーリ・ゲラシモフ) (尾崎清明・山階鳥研)	900
6	ネパールの熱帯地域の昆虫相とその保護管理に関する調査研究	国立トリブバン大学 (ネパール)	Keshab Shrestha (ケシャブ・シュレスタ) (中池 敏之・千葉中央大)	900
7	スラウェシ島に生息する希少鳥類セレベスクマタカ (<i>Spizaetus lanceolatus</i>)の個体数、分布、生息状況の現状に関する調査	原生自然保護協会 (インドネシア)	Wahyu Raharjaningtrah (ワユ・ラハルジャンングラ) (乾 由布子・ハートライフ・インターナショナル)	1,200
合計				9,040

助成金総額	20件	17,920
-------	-----	--------

いまなぜ「北方四島の自然保護」なのか

岡本 寛志（専務理事）

・北方四島のプロフィール

北方四島は南千島とも呼ばれ、択捉・国後・色丹・歯舞諸島の総称である。総面積は約5千平方キロメートルで福岡県程度であるが、国後の南端から択捉の北端までの距離は340キロメートルに達し、ほぼ横浜・仙台間に匹敵する。色丹・歯舞は根室半島の延長（千島外弧）と考えられるが、国後・択捉は千島内弧といわれる千島火山帯に属し、国後には最高峰爺爺（チャチャ）岳 1822m やルルイ岳 1486m、択捉には散布（フリップ）岳 1587m、西単冠（ヒトクツ）山 1566m をはじめ 11 の千メートル級の火山が聳え、その幾つかは活火山である。

国後・択捉は細長い島であるが、多くの湖沼を抱え、火山と共に変化のある地形を造り出している。また海岸線は比較的単調で、大部分は断崖と暗礁が連続し、港湾となる湾岸に乏しい。これに反し、色丹島は火山もなく比較的平坦であるが、南側は変化に富んだ風光明媚なリアス式の海岸となっている。また歯舞諸島はいずれも海食台地の島々である。

気象は太平洋側を南下する親潮と日本海を経てオホーツク海を北上する黒潮が接するために海霧が多く発生し、晴れの日が少ない。年平均気温は4、5度で根室辺と大差なく、冬季積雪は山間部を除き多くはない。

・植物相

南千島は亜寒帯常緑針葉樹林帯に属し、国後では南部と中北部の太平洋側では広葉樹林と針広混交林が見られ、国後の他の地域と択捉の大部分は針葉樹林である。森林の被覆率は、国後で6割、択捉では8割と高いが、色丹では4分の1と低く、シコタンザサ・チシマザサや高山植物が島の大部分を覆っている。

植物の種としては、多くは北海道と共通しているが、中には北海道では見られず、サハリンと千島に共通するもの、そして千島での固有種も数えられる。注目される固有種として、カタオカソウ、コダマソウ、チシマウスユキソウ、エトロフヨモギなどがあり、また日本本土にはないグイマツが、色丹と択捉の一部に生育する。

亜高山植物帯が千島列島では海岸線まで下りて来ているために、とくに色丹では全島が高山植物で覆われていると表現しても過剰ではない。

戦前林業で国後・択捉の森林伐採が盛んであったが、幸い酷しい気象と国防上の理由などから、大規模な皆伐を免れ、河畔林を含めて、まだ多くは原始の面影を止めている。

湿原は大規模なものはないが、河川の下流域に多く見られる。ただ一部には居住地として埋め立てられた地区もある。

・動物相

南千島周辺は魚類の宝庫であり、また河川にはサケマスがあふれるように遡行する。こうした環境から海鳥や海獣、それにサケをねらう獣や鳥達の理想的なハビタットとなっている。また南北1千キロメートルを越える千島列島は、日本（以南）とカムチャッカ・シベリアを往復する渡り鳥たちにとって、重要な回廊でもある。とくに固有種はないが、個体数の多さや稀少種の多様さが、島々の貴重性を物語るのである。

鳥類ではとくにウミスズメの仲間の豊富さが目立っている。日本ではもうほとんど見られなくなったエトピリカが群れをなしていると鳥類の専門家が感激する。ウミガラス、ハシブトウミガラス、チシマウミバト、ウミスズメ、ケイマフリ、ウトウなどが南千島では普通に繁殖しているという。ワシタカ科ではオジロワシやオオタカのほか、イヌワシ、オオワシも生息する。またフクロウ科では、シマフクロウ、シロフクロウ、キンメフクロウ、ワシミミズクなどの生息も確認されている。そのほかチシマウガラス、コアホウドリ、タンチョウ、クマガラ、オオジシギ、シマアオジなどもみられる。

海獣では、ゴマフアザラシ、ゼニガタアザラシが数千頭、トドも5百頭、ラッコは択捉で約1千頭が生息する。

ヒグマは国後(200頭)・択捉両島に多く生息する。食物連鎖の頂点に立つヒグマが高密度で生息することは、とりもなおさずその自然の豊かさを象徴している。

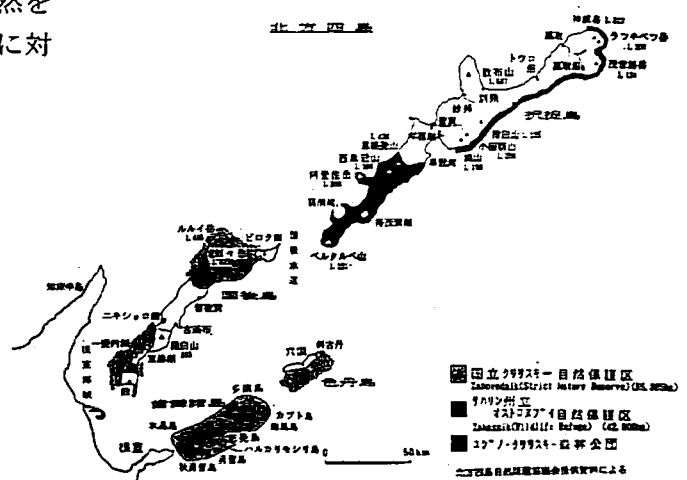
・自然保護の緊急性

北方四島は戦前戦後、酷しい気象条件と国防上の理由から、世界的にも珍しく生物多様性に富む亜寒帯性の島嶼として、開発の手から逃れ続けて来たのである。しかしいま北方領土返還という政治問題にさらされて、日ロ両国の「共同経済活動」が合意されるに至った。またロシア経済の崩壊から、住民生活の困窮・州政府の財政難が、いま豊かな自然の収奪という方向に動き始めている。マフィアがからんだ組織的な密猟、財政維持のための安易な開発許可、さらにまた保護区・公園管理の弱体化がこうした事態の悪化を加速させているのだ。

例えば択捉では国立公園に隣接する保護区を解除して、金鉱開発が開発されようとしているが、この地区の川にはサケが多く遡上し、シマフクロウが生息している。また国立公園のレンジャーは僅かな給料も払ってもらえず、人数が激減し、十分な監視も出来ない。密猟が横行し、レンジャーが狩猟の手引きをして生活費を稼ぐケースもあるという。

もちろん我々は、一日も早い四島の返還を望むものではあるが、いまはロシア側の管轄の問題だとして、その自然破壊を傍観してはならないのではないか。わずか5千平方キロメートルの島々の自然は脆弱である。将来返還された時には、もう貴重な自然は破壊し尽くされていたとしたら、それは看過していた私達の責任でもあるのではなからうか。どちらの国の管轄であろうとも、この自然を護ること、それは私達の子孫・世界に対する責務であり、いまその保護を叫び、何らかの支援策を打ち出すことが望まれるのである。

当基金では「北方四島の自然資料集」(16ページ)を編集作成しています。ご関心のある方は、送料120円の切手をお送り頂ければ一人一部に限り贈呈致します。



平成10年度決算ならびに平成11年度予算

当基金では平成11年5月17日に第13回理事・評議員会を開催し、平成10年度の事業報告、決算報告及び平成11年度の事業計画、収支予算案が承認されました。決算と予算は下表の通りです。

平成10年度決算ならびに平成11年度予算

(単位：千円)

項 目	平成10年度		平成11年度
	予 算	決 算	予 算
(収入の部)			
基本財産運用収入	51,700	48,018	45,275
運用財産収入等	30	544	25
前期繰越金	9,278	9,278	6,916
収入合計	61,008	57,840	52,216
(支出の部)			
事業費	34,560	33,049	28,590
活動助成	(11,560)	(8,880)	(7,500)
調査研究助成	(12,000)	(15,830)	(14,090)
海外調査研究助成	(9,000)	(5,960)	(6,000)
事業管理費	(2,000)	(2,379)	(1,000)
管理費等	18,400	17,875	16,900
次期繰越金	8,048	6,916	6,726
支出合計	61,008	57,840	52,216

北方四島の自然 — 写真展とシンポジウム

平成11年9月1日～30日、東京・渋谷の「地球環境パートナーシッププラザ」において、根室・北方四島自然問題協議会主催の写真展「北方四島の自然」が開催され、豊かな自然の50枚のパネルが展示された。

またこれを機に9月28日同所において、(財)日本野鳥の会、札幌・北方四島の自然保護を考える会主催のシンポジウム「北方四島の自然を考える」が開催され、約60名が参加、北大名誉教授勝井義雄、野鳥の会常務理事市田則孝、当基金評議員和田一雄ほかの方々から、四島の自然とその保護についての話があり、北方四島についての新しい情報を伺うことができた。

これらの催しはいずれも当基金の助成によるものです。

編集後記

歳の瀬も近づき皆様お忙しくお過ごしのことと存じます。今年は世界中で地震が多発し、お気の毒な方達が沢山出てしまいました。これは環境汚染の影響ではないとしても、汚されたことに対する大地の怒りの現れだと思えます。地震そのものに対する予防策はないのかもしれませんが少しでもその怒りを静めることが出来るように我々が出来ることは何かを一人一人が考えなくてはならないと思えます。そして今度の年末には来年は良い年でありますようにではなく、来年も良い年でありますようにとご挨拶ができるように努力をするように心掛けましょう。(岡本 和子記)

Pro Natura ニュース 第9号

発行者：財団法人 自然保護助成基金

発行年月日：平成11年12月8日

〒150-0046

東京都渋谷区松濤1-25-8

松濤7初克斯 2階

TEL:03-5454-1789 FAX:03-5454-2838

E-mail:pro-natura@muji.biglobe.ne.jp